

謹賀新年

弊店儀創業以來四百餘年、内外圖書の刊行尠かならず、若干我國文化に貢獻仕候事は諸賢の御懇篤なる御引立に依る儀と感謝罷在申候、殊に日蓮宗門とは古來關係淺からず、平樂寺の寺號を許され、宗典の發行數百種に達し、宗門書肆として聊か面目を保ち今日に及び申候。

本年は日蓮聖人第六百五十遠忌に相當仕り從て來る四月妙滿寺大法要御參列の爲め御入洛の節は是非小店へ御立寄り之程偏に奉希上候。

右年頭御挨拶旁如斯御座候。

京都市東洞院通三條上ル

宗門書肆 平樂寺書店

電話本局(2)四三三三番

價定一統

一ヶ年	半ヶ年	一月
金壹圓貳拾錢	金壹圓貳拾錢	金貳拾錢
送料共	送料共	送料五厘
事之金前	事之金前	事之金前

料告廣一統

四分	一分	一頁	一頁	一頁	一頁
金五圓	金九圓	金拾圓	金拾圓	金拾圓	金拾圓
事之金前	事之金前	事之金前	事之金前	事之金前	事之金前

昭和五年十二月廿四日印刷納本 (第四百三十號)
昭和六年一月一日發行

製復許不

編輯兼發行人 磯部滿事
印刷人 鈴木日雄
印刷所 東京府荏原郡品川町南品川百八十一番地
電話高輪六〇二四番

發行所 統一發行所

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ

次 目

- 法統の愛護 (承前).....本多日生
- 實生活との關係より見たる佛教.....本多日生
- 記事
- 各地教報
- 誌料領收

號月二年六十三第

統



法 統 の 愛 護 (承前)

六、法統愛護の重大性

七、釋尊と法統愛護

八、法統正脈の内容

大 僧 正 本 多 日 生

六、法統愛護の重大性

前回到「法統の愛護」と題して御話を申し上げたのであります、即ち法統の愛護すべき所以と、常樂院日經上人の身命を擲つて法統を愛護せられた事蹟、竝に開祖日什上人の法統愛護の事蹟、進んで日蓮聖人の法統愛護の事蹟を御話申し上げ、時間の關係上途中で終つたのでありまして、その際の御約束として、次回には法統そのもの、内容、釋尊の法統愛護の思召に就て申述べやうといふになつて居つたのであります、乃ち本日はその二つの事を申し上げるのであります、それに附加へて更に法統愛護の大切で

あることを一言致して進んで行きたいと思ふのであります。

それは前回の始にも申し上げた事でありましたが、我が國民道徳としては御主君の血統を守立てる、彼の政岡が鶴千代君を御保護申した如き、或は寺小屋源藏松王丸が普秀才を御保護申上げた如き、元祿四十七士が淺野家の再興を考へて命を棄てた事實、その他南朝の志士が南朝の天子に忠誠を捧げ、殊に楠公一族の如き悉く身命を捧げて南朝の天子を御援け申上げ、同じく皇族であらせられても南朝の天子と北朝の天子には正閏の違ひがある、それを正して南朝の忠臣は吉野の山に立籠り笠置の行在所に艱苦を嘗

めて、勢力の衰へて微弱の如くに見えるけれどもその正統天子を御保護申上げたのである、さういふ所に我が國民道德の無量の尊さがあるといふことを申上げ、それから一轉してさういふ皇統とか血統とかいふ人格でなく法格のもの、その教その法を護るといふことが、或はそれ以上に大切になつて来るものだ、併し考の低い人はそこが解りにくいといふことを申したのであります、もう一度その事柄を明にして置きたいと思ふのであります。

親に孝行する事實——何某といふ子が何某といふ親に孝行をしたといふ事實は無論尊いことであります、又何某といふ忠臣が何某といふ君主に忠節を捧げたといふ事實は尊いことでありますけれども、その忠孝の事實が盛に行はれるやうになるのは、さういふ教、さういふ道德の主義が行はれて居るからして、そこで忠孝の事蹟といふものが生れて来るのであります。忠孝の教、忠孝の道德といふものはもう

な人が出来たのである、自然薯が出来るやうな譯のものではない。教が先に無くして、さうして茲に忠臣孝子が出て来るのを待つといふことであつたならば、是は實に愚なこと、種を播かずに、畑に行つて大根が生えるか人参が生えるかと思つて見て居るやうな話で、是程愚なことはないと思ふ。だから忠義や孝行の事實といふものは大事であるけれども、その事實を生出す教を大切にしない限に於ては、その事實は次第に亡びてしまふ譯である。それが今言ふ法格といふものであつて、人格の何某といふ人が何某といふ主人に忠義を盡したといふ前に、人たる者は忠義の重んずべきことを知れといふ教があつて、その教を守ることに依つてさういふ人が出て来るのであります。法統、道統といふものを愛護することは、楠公が後醍醐天皇の爲に忠節を盡して居るよりもヨリ尊いものだといふことを知らなければならぬ。

是は舊いもので詰らないものだといふ風にして、段々忠孝主義の道德を破壊して参りましたならば、忠義の者、親孝行の者は最早それから出て来なくなつてしまふのであつて、忠臣孝子は、自然薯が獨りで山に生えるやうに生えて居り、獨りで出来るものではないのであつて、皆教を通して始めて忠臣孝子といふものが生れて居るのである、教が先である。若しも或る家庭に孝子が出たとすれば、その家庭には親孝行の道德の重んずべきことが存して居るからして孝子が出て来るのである、その家庭が親孝行の道德を嘲り呪ふてその反對の思想を取入れて居つたならば、決して親孝行の事蹟といふものは在るべきものではない。

國家に於ても忠臣が出て来るのは、忠義が大事だといふ教が先にあつて、それで出来るのである、忠臣の四十七士は、山鹿素行先生に養はれて最も節義の重んずべきことを薰陶されたから、あゝいふ風

それがチョット日本人には解らなくなつて居る、法が重いといつても、法といふのは何か、國は法に依つて昌えるといふその微妙な所が解らない、何だか坊主が本堂の中で喋つて居ると思つて居るから、そんなことは何にもならぬではないかといふ風に考へて、教を保護し教を興隆せしむるといふ觀念が非常に乏しくなつて来て居ると思ふのであります。それ故に佛法が人を救ふといふのも、教を正してその教を盛んならしむるといふ處から行かないと、教といふものが分らないで堂塔伽藍ばかり大きく拵へ、坊さんの頭數ばかり立てても、それで人が救はれるものではない。人は一人であつても、所は野原であつても、正法正義の正師があつて即ち佛祖正脈の法統を發揮する所に於て、多數の衆生が濟度されるのである、それが日蓮聖人の尊さとなり、日經上人の尊さとなつて佛教の歴史に光を放つ譯である、その尊い意味合いから考へて行かないと法統の愛護と

いふやうな氣の利いた意味合は解らないことになる譯である。

併し日本の國民道徳では忠義孝行といふことを必ず述べるが如くに、日蓮主義の教化の中には法統愛護といふこと、之を簡単に言へば「護法」と斯う申す。「我は身命を愛せずして但無上道を惜しむ」身は軽くして法は重い、身を死して法を弘むといふ風に、法の重んずべきことを徹底的に教へ、日蓮聖人は如何なる場合でも、それを言ふのである、龍の口の首の座に坐つて將に首の刎ねられんとする際に於ても、それは首を斬られることは痛いけれども、日蓮の躰は惜しむに足りない、之に依つて正法を擁護し得たならば、是れ程欣ばしいことはない、「臭き首を法華經に捧げて金色の如來となる」といふのはその事を申すのであります、臭き首を法華經に捧げてといふその意味合ひが、今申す自分の身命を擲つて法統を愛護し得るならばといふことなのである。

つて、物を裁斷して恐れず進んで行くやうな意味合ひ、さういふ人間の智慧なり、誠なり、温かなる人情なり、果斷決行の勇なり、さういふ智仁勇の三つの道徳を之を三種の神器に依つて象徴して形に示されて居るものである。何もその品物が値打があると譯ではない、自然これはさういふ意味を籠めて品物が尊くなるけれども、その教の意味を除かれたならば、唯それが道具として使ふてある金が値打があるとか、さういふやうなものではないのである、その品物の價值ではなくして、それが表現する所の教なり、さういふ意味合が籠つて三種の神器に無限の値打がある譯である。

だからやはり鏡を大事として居つただけではそれは本當に解つて居ないので、鏡を通してそこに包まれて居る、現はされて居る徳を大事とする、教を大事にするといふことが大切である、さうすれば鏡は大事に傷付かぬやうにして居つても、徳は疾の昔に

そこで此の思想は前回にも申した通りに儒教に於ては先王の道を尊むといふことで現はれ、惟神道の方では皇祖皇宗の遺訓にして子孫臣民の俱に遵守すべき所と仰せられて、何處までもこの道といひ道統といふものゝ大切なることを御示しになつて居る。

三種の神器が大事だと申すことも、あの三種の神器はやはり教ナンである、唯その品物が貴いといふだけではない、鏡とか玉とか劔とかいふその品物が寶チャといふだけではない、三種の神器はそれに籠つて居る教の意味合ひを大事にする譯ナンである、鏡の徳、玉の徳、劔の徳といふもの色々その説もあるけれども、大體鏡は人間の心の誠を現はす、さうして智慧を示して居る所のものである、玉の方は蘊積といふて物を包み重ねて行くもの、形の小さい中に色々物が這入つて居るやうに、徳を積重ねて行く温かな意味合を言ふのである、人間の情の徳を示して居るのである、劔は果斷決行といふて勇氣であ

忘れて居るといふことでは、それは本末輕重が分らぬといふことになる。左様なことを少し御考えになれば法統愛護といふことの如何に大事なものが、一人の親に孝行をする、一人の主人に忠義を盡すといふよりは、多くの人々をして、悉く忠臣孝子たらしむべく、さうして後代に傳ふる所のその教を護つて行くといふことは、唯自分が一個の忠臣であるよりも、忠臣を無限に生み出す所の教を保護することの更に尊いといふことが分るのであります。

七、釋尊と法統愛護

次に釋尊が如何にこの法統を大切に御考へになつたかといふことに就て少し御話を申上げて見やう。釋尊は如何なる場合に於ても此の法といふものを重んじられた、法といふ意味は色々あるけれども、今は暫く之を教として御話して行きます、教法と申して教であります、釋尊が悟りを御開きになつてそ

しから涅槃せられるまでザツと五十年と申して居りますが、この五十年は何をなさつて居つたかといふと、一口に釋尊は説法をなさつたと斯う申すのであります、教を説いて廻るのが佛様の御仕事であるのである、その教といふものが大事であるから説法教化といふことを以て一代を畢らせられたもので、最後にも涅槃を説かれるといふことで、息を引取る瞬間まで釋迦如來は教を説かれた、この位、教の好きな人もないものである。悟を開いたならばその悟を開いた瞬間から、如何にこの教を説くべきか、といふことに心を碎かれ、最後涅槃を示さうとして涅槃の床に這入られた時に、若い時の友達の須跋陀羅といふのが訪ねて來た、阿難尊者はあゝ遅かりし、御釋迦様は御説法が好きだけれども、もう誰が來ても會はぬといふて涅槃しやうと御休みになつた、一と足遅かりしと云つた、須跋陀羅は非常に残念がつて、それは實に残念なことである、私も今まで我慢

を買いて御釋迦様の向ふを張つて來たけれども、今日こそ教を請はうと折角來たのに、一と足のことで教を受けられないといふことは残念ぢやと地圓駄踏んで後悔した、何とか一つ阿難尊者私が頭を下げて來たといふことを申上げて呉れといふと、それはいかぬ、お前の我慢は酷い、五十年の長い間頑張り続けるといふことで、今となつては取次がれないといふて斷つて居る、さうすると御釋迦様が阿難々々と呼んで、何をゴタ／＼言つて居るか、申上げぬ譯には行かないから、須跋陀羅がやつて參りまして教を受けたい、あなたの仰せの通りもう駄目だと斷つたら地圓駄踏んで残念がつて居るのでありますといふと、さうか通せと仰せられ、それからまた須跋陀羅の爲に法を御説きになつた。

『説くべき法は説き終り度すべき衆生は度し訖り、將に涅槃せんとして、最後に須跋陀羅を度したまふ』と御經の中に説いてある、その位説法が好きなら

ある、私も大分説法が好きであります、目下醫者から講演を禁じられて居るが、この二十二日に名古屋の教化會館で演説をした、階段を上ると、皆信者は少しばかりで宜しうございませう一寸で宜しうございませうといふたけれども、併し演壇に上ると丁度一時二十分ばかり演説をしました、今日も川原さんから、一寸にして置いて呉れと親切に言はれたから、有難うといふて居たが、此の調子ですとやはり相當時間が掛かるかも知れぬ。それは佛は最後に須跋陀羅を教化なさつた、須跋陀羅は感激して非常に喜んで、あなたが御涅槃なさるのを見て居ることは出來ないから私の方が先に御免を蒙むるといふて、須跋陀羅は滅盡定に由り先に息を引取つてしまつた、是は名高い事實で、釋迦傳に於て誰も知らない人はない、有名な美しい話になつて居る、その位に釋迦如來が五十年の説法教化といふことをなさるのは、是が一番大事なこと、教を護り教を盛んならしむ

る、それに依つて本當の救ひといふものが出来るのであります。

それ故に釋迦如來が轉輪聖王の事を説かれる時に——轉輪聖王は理想的模範的の王様を申すのであります、その轉輪聖王が位を太子に譲り、太子が轉輪聖王になる譯であります、その時の心掛をどう説かれて居るかといふと、假令倉に在るとのやうな實がなくならうともそれは敷くことはない、自分の支配して居る土地を奪はれようとも、時と場合に依れば領地が縮小されてもそれは已むを得ぬが、轉輪聖王の命に懸けても護らなければならぬものは何か、それは法である、その法といふのは教であつて、道徳、宗教、さういふやうなよい心掛のことが法といふ言葉で現はされて居るのであるが、轉輪聖王は法を護り、法を盛ならしむといふことを一番大事にしなければならぬと説かれてある。日本の天子様の思召も結局はさういふ譯で教育勅語には『斯ノ道ハ皇

祖(そ)皇(くわ)宗(そう)ノ遺(い)訓(くん)ニシテ」と仰(おほ)せられるあの下(しも)を讀(よ)んで見(み)れば、天(てん)子(し)様(さま)の第(だい)一(いつ)の心(こ)掛(かけ)も法(ほ)法(ほ)である、今(いま)の天(てん)子(し)様(さま)が文(ぶん)部(ぶ)大(だい)臣(しん)に賜(たま)つた優(ゆう)談(だん)といふのがありまが、それにも「我(わ)カ祖(そ)皇(くわ)宗(そう)ノ國(こく)ヲ經(けい)スルヤ教(け)化(か)ヲ先(ま)トナス」日本の御(ご)先(せん)祖(そ)が日本(にほん)の國(こく)家(か)を經(けい)營(えい)なされるに何(なに)が一番(いちばん)大事(だいじ)かといへば教(け)化(か)を以(もつ)て、一(いち)番(ばん)先(せん)として日本(にほん)の國(こく)の經(けい)營(えい)は出(で)來(き)て居(ゐ)る、さうして偉(ゐ)い人(ひと)の書(か)いて居(ゐ)る本(ほん)が皆(みな)日本(にほん)の皇(くわ)祖(そ)皇(くわ)宗(そう)は、日本(にほん)の國(こく)を經(けい)營(えい)するに當(あた)つては先(ま)づ大(だい)經(きやう)を樹(た)つといふて居(ゐ)る、近(きん)來(らい)考(かう)の低(ひく)いものが、日本(にほん)の建(けん)國(こく)は唯(ただ)單(たん)に武(ぶ)力(りき)である考(かう)へて尙(しやう)武(ぶ)建(けん)國(こく)といつたり、色(いろ)々(ざ)々(ざ)小(こ)さな見(み)方(か)をして居(ゐ)るけれども、さうではない、日本(にほん)の建(けん)國(こく)はや(は)り道(みち)を以(もつ)て建(た)てられたものである『皇(くわ)祖(そ)皇(くわ)宗(そう)國(こく)ヲ肇(しやう)ムルコト宏(こう)遠(えん)ニ德(とく)ヲ樹(た)ツルコト深(しん)厚(こう)ナリ』その德(とく)を樹(た)てて日本(にほん)の國(こく)家(か)といふものは出(で)來(き)て居(ゐ)るのである、その德(とく)といふのは即(すな)はち法(ほ)法(ほ)であり、道(みち)である譯(わけ)なのである。それから轉(てん)輪(りん)聖(せい)王(わう)のこゝで御(ご)釋(しゃく)迦(ぢ)様(さま)が今(いま)いふやう

據(よ)に忠(ちゆう)義(ぎ)を盡(つく)すといふことが法(ほ)法(ほ)である、その外(ほか)にムニヤ／＼といふものがある譯(わけ)ではない、それを誤(ご)解(かい)しないやうにして置(お)かなければならぬ。そこで御(ご)釋(しゃく)迦(ぢ)様(さま)は、法(ほ)法(ほ)經(きやう)だけ之(これ)を考(かう)へて見(み)ると法(ほ)法(ほ)といふものを傳(た)へて行(い)くことが大事(だいじ)だといふので、

法(ほ)法(ほ)經(きやう)は法(ほ)師(し)實(じつ)塔(たつ)に事(こと)起(おこ)り 涌(う)出(で) 壽(じゆう)量(りやう)に事(こと)顯(あら)れ 神(じん)力(りき)曠(くわう)累(るい)に事(こと)竟(さか)る

と法(ほ)師(し)品(ひん)第(だい)十(じゅう)、實(じつ)塔(たつ)品(ひん)第(だい)十(じゅう)一(いつ)の所(ところ)から法(ほ)法(ほ)經(きやう)の大事(だいじ)を説(と)くのでありまが、その法(ほ)師(し)品(ひん)第(だい)十(じゅう)は何(なに)が説(と)いてあるかといふと即(すな)はち此(こ)の法(ほ)法(ほ)經(きやう)を弘(ひろ)めることに就(つ)ての心(こ)掛(かけ)を説(と)いてある、法(ほ)師(し)といふのは要(よう)するに法(ほ)法(ほ)經(きやう)を弘(ひろ)める者(もの)である、頭(あたま)を剃(か)つて居(ゐ)る者(もの)ばかりが法(ほ)師(し)ではない、有(あ)る髮(は)の法(ほ)師(し)といへば、女(め)の女(に)が丸(まる)髷(まげ)に結(むす)つて居(ゐ)らうが、七(なな)三(さん)に結(むす)つて居(ゐ)らうが、そんなことは構(かま)はない、御(ご)經(きやう)を讀(よ)んで見(み)れば分(わ)る、法(ほ)師(し)といふと頭(あたま)を剃(か)つて居(ゐ)れば木(き)賃(ぢ)宿(しゆく)から出(で)て行(い)つても

に一番(いちばん)大事(だいじ)なこゝとして法(ほ)法(ほ)といふことを教(おし)へられたが、その通(と)りに佛(ぶつ)法(ほ)法(ほ)を貫(つら)くものも亦(また)法(ほ)法(ほ)といふことである、唯(ただ)その法(ほ)法(ほ)の内容(ない)が一種(いっしゆ)分(ぶん)らぬものゝやうに考(かう)へて居(ゐ)るとい(い)かない、法(ほ)法(ほ)といつても何(なに)も魔(ま)法(ほ)法(ほ)みたやうなものを謂(い)ふのではない、や(は)り親(おや)には孝(かう)行(ぎやう)、主(しゆ)人(じん)には忠(ちゆう)義(ぎ)を盡(つく)す、その爲(ため)には互(たがひ)に扶(たす)け合(あ)つて行(い)くといふ、さういふ道(みち)德(とく)上(じやう)のことがそれが法(ほ)法(ほ)を重(おも)んずるといふことになる、佛(ぶつ)法(ほ)法(ほ)には一(いっ)種(しゆ)へんな考(かう)があつて、法(ほ)法(ほ)といふものはムニヤ／＼といふ、眞(しん)言(ごん)のやうに袖(そで)の中(なか)でムニヤ／＼といふ解(か)らぬものゝやうに考(かう)へて居(ゐ)る、法(ほ)法(ほ)宗(そう)にもそれが附(つ)随(ずい)して居(ゐ)る、さういふものではない、御(ご)釋(しゃく)迦(ぢ)様(さま)が法(ほ)法(ほ)が大事(だいじ)だ、法(ほ)法(ほ)が大事(だいじ)だといふのは、何(なに)も魔(ま)法(ほ)法(ほ)みたやうなことを言(い)ふのではない、法(ほ)法(ほ)經(きやう)に於(お)いていへば佛(ぶつ)様(さま)の有(あ)る難(がた)いこと、色(いろ)々(ざ)々(ざ)いふやうな實(じつ)際(さい)の事(こと)柄(がら)を法(ほ)法(ほ)經(きやう)の教(おし)に依(よ)つて示(し)すのである、それが法(ほ)法(ほ)である、法(ほ)法(ほ)といふのは日(にっ)常(じやう)の家庭(かてい)に於(お)いて孝(かう)行(ぎやう)を盡(つく)し、日本(にほん)に於(お)いては天(てん)子(し)

「あれは坊(ぼう)さんだ」さうしてあつちこつちの交(こ)番(ばん)で叱(しか)られて居(ゐ)る、さういふ者(もの)を謂(い)ふのではない、善(ぜん)男(なん)子(し)善(ぜん)女(にょ)人(にん)を謂(い)ふて居(ゐ)るのである、頭(あたま)が剃(か)つてあるなといふことは何(なに)でもない、それが法(ほ)法(ほ)經(きやう)の在(あ)る家(か)善(ぜん)薩(さく)と申(まを)して法(ほ)法(ほ)經(きやう)の爲(ため)に教(おし)を説(と)く、さういふ意味(いみ)に現(あら)はれて居(ゐ)るのである、法(ほ)師(し)品(ひん)に於(お)いては左(ひだり)様(さま)にして人の爲(ため)に法(ほ)法(ほ)經(きやう)を説(と)く者(もの)を如(ごと)く來(き)の使(つか)ひであるといふので、一(いっ)劫(ごつ)といふ長(なが)い間(かん)佛(ぶつ)に對(たい)して惡(あく)口(くち)難(がた)言(ごん)したよりも、法(ほ)法(ほ)經(きやう)の行(ぎやう)者(しや)に對(たい)して一(いっ)言(ごん)惡(あく)口(くち)を言(ごん)つた方が罪(つみ)が重(おも)い、一(いっ)劫(ごつ)の間(かん)如(ごと)く來(き)を供(く)養(やう)したよりも法(ほ)法(ほ)經(きやう)の行(ぎやう)者(しや)にした僅(ちひ)かの供(く)養(やう)の方が深(ふか)いと懇(こ)々(ざ)説(と)かれて居(ゐ)る、それは何(なに)かといふと法(ほ)法(ほ)を弘(ひろ)めることを奨(すす)勵(れい)する爲(ため)にその事(こと)を言(い)はれたので、法(ほ)法(ほ)經(きやう)を弘(ひろ)めんが爲(ため)に努力(どりよく)して居(ゐ)る人間(にんげん)は、是(こゝ)は小(こ)さい子(こ)供(こ)が僅(ちひ)かの荷(に)物(ぶつ)を提(た)げてヒヨロ／＼して行(い)くのであるから、それを

轉(か)げないやうに護(まも)り立て、やれば、その子(こ)は目(め)的(てき)の地(ぢ)に持(も)つて行(い)くことが出(で)來(き)る、後(あと)から指(さ)一本(いっぽん)突(つ)けば倒(たふ)れ

るやうに、法を弘めるものは力弱きものである、如來は反對があつても影響を受けない、一劫の間如來も、法華の行者は一寸の反對を受けても或はそれが爲に道念を失つて、坊さんならこそ面倒なことを言はれる、鉢巻して壽司屋になれば此方も一人あちらも一人、坊さんは面倒臭い、斯んなことは罷めたら宜からうといふことになる、それを授ける者は、その人が説教は上手でなくても「御苦勞さんでした」と言へばまたやる氣になる、それを「あなたの話を聞いて居ると頭が痛くなる」斯ういふことを言ふとその者は非常に怒つてもう坊主は罷めてやれ、商賣替へするならずつと尖端を行つて強盗にでもなつてやれといふやうな青年が出来ないと言へない、それはあるものである、現に私共はさういふ事實に幾らも接して居る、餘程立派に見えるものでも人間といふものは豹變するといふて、七面鳥みたいにクルツ

と變る危ないものであるから、そこで末代の法華經の行者を少しも援けてやれば、一劫の間如來に功德を捧げたよりも勝つて居る、その精神は何か、法を守立て、法統を擁護せんが爲に法師品といふものが出来て居る、ひそかに一人の爲に法華經を説くは如來の使ひなり、一言を以て褒めるのは、一劫の長き間如來を供養するに勝ると獎勵をして、法華經の宣傳を鼓舞策勵されたものである。

見寶塔品に至つては尙ほ優れた意味に於て是が現はれて来て、多寶如來が此處に出られたのも何の爲に出られたか、その譯が聞きたいといふて皆が騒いだ時に多寶如來は寶塔の中から、何も外の爲に來たのではない、法をして久しく住せしめんが故に茲に來せり、此の法華經の法を久しく世の中に止めて人を救ひたいと思ふから此處に來たのである、「法をして久しく住せしめんが故に此に來せり」

(令法久住故來至此)

と申して是は有名な句であります、又釋迦如來は大音聲を上げて宣言せられた「久しからずして當に涅槃に入らんとす」法華經を説き了れば遠からずしても涅槃に入るのである「此の妙法華經を付囑して在ることあらしめん」と欲す「誰にでも此の法華經を託して後代に弘めたいと思ふといふ、是は「付囑有在」と申して非常に名高い言葉であります、付囑といふのはその教をその者に託して、自分が涅槃に這入つた後はこの法華經を引受けてやつて呉れるものがなければならぬが、その志ある者はこゝに申出るやう、之を繰返して三遍御宣言を寶塔品でするのであります。

さうして六難九易と申して、中々法華經に盡すのは骨が折れる、どういふものか法華經には反對がある、所謂良薬口に苦しといふか、或は高き木には風が當るといふか、優れた教には反對が起る、此の法

華經の宣傳でも之をクラスを下げてドンドコ法華式にやれば一人も反對は起らないが、法華經はその意味に於て六難九易と申して、大きな山を抱へて空を飛ぶことは出来ても、法華經の爲に盡すことは出来にくいとか、色々出来ないやうな困難なことを擧げてそれよりも是は更に困難であるといふことを説かれた。それ位法華經の宣傳は困難である代りには、この法統を擁護する者の功德は是れ亦廣大無邊である、その弘める人に功德があるばかりではない、その教を受けたる者、救はれる上に於て又非常な尊い御利益を受けるからといふことで、茲に三遍付囑の宣言をせられた。

それから引續いて惡人女人の濟度せられるといふことになる、さういふ御利益のある教であるから之を弘める、外の教のやうに惡人を救ひ得ない、女人を救ひ得ないといふことはない、彼の大惡人提婆達多も救ひ得た如くに、法華經は如何なる男女をも悉

く教ひ得るものである、故に法華經を宣傳する者は、『是れ諸の天人、世間の眼なり、恐畏の世に於て、能く須臾も説かば、一切の天人、皆應に供養すべし』

といつて、非常に法華經の法統を擁護して行く者を稱揚讃歎せられた、或る學者は、法華經の法師品寶塔品提婆品勸持品を讀んですつと進んで行くと、如何なる心なき者でも法華經の法統擁護の爲に盡さなければならぬ、法華經の爲に一人の人間に話をしても、佛は如來の使ひなりといふ廣大なる言葉を與へられる、法華經を信じなさいといふ一言を言へば、直ぐに御釋迦様の使ひなりといふ尊い獎勵の御言葉がある、讀んで行けば如何なる者でも活躍する心持が起る、心なき草木も立つて舞はんとすといつて、草も木も活きたるもののやうに活躍せんとするやうな大きな力が法華經の中にはあるといふ事を申して居る。それに就てこの法を守立て、行くことを

法華經を説き了つて懇切に此の法に傷を付けるなどいふことを説き置かれた、神力囑累の次に起つて來るものは皆命懸けで働くものだといふことが説かれて居る。藥王品の第二十三に於ては藥王菩薩が身を捨て、法華經の爲に盡されたことが説かれて居るのである。

左様にして皆法華經の宣傳は法統愛護の爲に身命を賭して闘ふ一種熱烈なる宗教として興つて來たものである、その簡単な言葉は『身輕法重』といふので、身は輕く法は重い、斯ういふ言葉が何時も標語になつて居る譯であります。尤も坊さんの中でもさういふことを感じないものもあるのである、それは最早佛祖の道統から言ふては所謂背教者でありませぬ、吾々は日經上人などが命を捨て、闘はれた血を受けて、その十分の一なり百分の一なりの精神を繼いで、茲に法戰を開始して居る一人である、さういふ考を持たないでばんやりして居る者もあります

獎勵せられて、それから法華經の中心思想たる如來壽量品が現はれ、現はれ終るや是を上、行等の菩薩に付屬するといふことになる、即ち如來神力品に於て上、行等の菩薩に法華經を付屬せられた、付屬といふのはそのものに託して、困難なことはあらうけれども教に傷を付けずにこの教を弘めて呉れろといふことである、それが爲に日蓮聖人として御生れになつて

『今日蓮が所行は、靈鷲山の稟承に芥子ばかりの相違なき、色もかはらぬ壽量品の事の三大事なり』

といふて、日蓮が今弘める教は釋尊より授かつた通り色も變らぬその通りを日蓮は弘めるものである、それであるから假令自分の命に及ばうとも此の教には傷を付けることは出來ない、それを所謂拳々服膺して命に及ぶやうなことも屢々あつたけれども、嘗て一度も教には傷を付けない。それは御釋迦様が法

けれども、それは最早論するに足らない者なんでありませぬ。又法華宗にも澤山信者があるけれども、何處に詣つた方が御利益が多いだらうか、こちらは三錢の賽錢で是だけの御利益がある、こちらは二錢に負けて置くといふことで、さういふ詰らない所から信仰を考へて居る人もありますけれども、さういふ低級なる考の者は信者の方に於ても是は論するに足らないものである、本當は此の結構なる教に會ひ奉つて自ら之を信じ、又自分の家族も之に依つて救はれる、進んではこの法を愛護して未來に成佛したといふことで茲に優れた信者が現はれて來るのである。それを例へば忠臣蔵の命を捨て、御主人の爲めといふ亭主に對して、「そんなことは御やめなさい、さうして一緒に逃げませう、いつそ小田急で逃げませうか」といふやうなさういふ思想の者と、「あなたに御主人の事を御忘れになつてはいけませんぬ」といふのとは大いに違ふ、法華經を信する以上は、

日蓮聖人も法の爲に命を擲つて闘はれ、常樂院日經上人もあの通り迫害の爲に耳を割がれ鼻を削がれ、専心一念法統の正義を護る爲に艱難辛苦を経て來られた、その正しき法に繋がり信仰を得たといふことに就ては、先祖の血と涙を以て滴かれたその正しき法統の末に加はつたことを欣んで、どうぞして此の正しき信仰を維持し、且つこの正しき信仰をせめて一人たりとも弘めるやうに致したいといふ、その眞劍なる所に力もあり面白味もあり、そこにまた一種謂ふべからざる幸福感といふものも湧いて來るのである、幸いやうな所にそこに何とも言へない幸福の觀念があるのである。

左様にして御釋迦様に於ても此の法統といふものを非常に大事に御考へになつて、さうして是が濁るといふことを憂慮せられるのであります、折角の尊い教が濁つてはならぬからといふので、涅槃經にも警返してその事を警しめられて居ります、日蓮聖人

もその御經を到る處に引かれるのであります、それは教を紊る者が出て來る、その教を傷つけ紊る者を警しめなければならぬ、それを教へ「呵責し駈遣せずんば其の者も亦佛法の中の怨なり」といふので、如何にして佛法中怨の責を逃るべきかといふことに就て折伏化導といふことも起るのであります、どうしても正義を愛護する者は左様な迫害反對の中にもこの正義を擁護しやうとして進んで行かなければならぬ、一つ譬を擧げられて、正義といふものは中々行はれにくい、栴檀といふ香木を賣歩く者が朝から晩まで賣歩いても餘り分量が少くて高價なものといふので買うて呉れない、翌日もまた翌日も、終日栴檀を買歩いたが買手がなかつた、所が炭を賣る者を見ると、朝車に満載して居たのがもう午頃にはすっかり賣つてしまつて樂々と車を曳いて歸る、愚なる栴檀賣は、どうも炭にして賣れば賣れると思つて結構なる栴檀を焼いて炭にして賣歩いた、賣れるには

賣れたけれども全部にして五錢にししか賣れなかつたといふことを擧げて、栴檀の如き如來の正法を炭にしてはならぬといふことを説かれて居るのである、吾々は不肖ながらさういふ炭賣りの眞似はしたくないといふので今日まで頑張り通して來た次第である、そこに此の統一閣の布教の本旨といふものが存する次第である。

八、法統正脈の内容

次に法統の内容を少し申して見たい、是は要するにむづかしい言葉で形に現はせば、法統として傳はるその法華經の意味合を正しく解釋する、法華經を方便の教のやうに墜してはならない、法華經を迹門の教義に墜してはならない、本門の教義に基いて法華經を弘めて行くそこに法華の正脈があると斯ういふ次第である、同じ皇族でも南朝と北朝とあるが如くに、同じ法華經でも迹門の意味に墜したのでは、

南朝を抑へて北朝に味方するやうなものである、どうしても顯本法華に基かなければならぬものであるが、それは外部から言ふ言葉である。内容實質といふものを少し能く消化して考へて置かなければならぬ、それは前に言ふが如くに法華經を法どか教どかといふけれども、別途のものが在るのではない、法華經の教の實質といふものは、即ち自分自身と佛様との兩方の關係といふやうなことに存するものである、法といふのは何か魔法みたやうな、譯の分らぬクシャヤ／＼言ふものがあるのではない、この妙法蓮華經といふ蓮華といふものは是は實は花の咲いて居る時に中に實が出来て居る、その實の中に芽が出て居る、因中果在り、果中因在りといふ、因果同時といふことを現はして居るものである、是は一蓮頭に一つくりと入れて置かぬと、法華といふことも少しも分らぬことになつてしまふから、何遍も言ふ言葉であるが今日は少し落付いて頭に入れたら宜から

う、折角人間に生れて来て法華經を何遍も聴きなから、解つたやうな解らぬものだといふので死んで行くのは残念な次第であるから、一つ本気で聴いて見たら宜からう。

因果同時といふのはどういふことであるか、是は何時も御話する通り、雞の卵と鶏と考へたら宜い、卵から雞が孵るのだから、卵を因として雞を果と考へる、梅の木で行けば梅の實は梅の木に生つて、梅の木は梅の種から生えたと斯う考へる、所がその梅の實はどうした、梅の木から生つた、だから木が先か種子が先かといふ問題である、あなた方考へて御覽、梅の木といふものは種子が先か、木が先か、それは種子から生えたんだけ、その種子は……その木に生つた、それを段々推して行くと、梅の木と梅の實といふものは同時に存在するものとして考へなければ話が付かない、又之を子供と親と考へても同じである、親が子を生む、子供は之をむし返して行つた

ならばそれが子を生むやうになる是は子供が親として子を生むべきものを持つて居るのである、子供も親も同じものである、だからそれを段々に考へて行くと、一切のものは因と果が同時に在る譯である、氣候で言つても同じ譯である、冬があるから春があり、春があるから夏があると考へて行つてクルクル廻つて居る、それを冬は秋があるからといつて行くと、どちらが先か、冬が先か春が先かといふことは出来ない、四季といふものは同時に存在するといふことを言はなければならぬ、それは何遍言つても同じことである、一切のものは因も果も同時に存在する、それを言現はすには連が一番好い、連は咲くと下に蓮臺があつて蓮臺の中にはもう既に葉が出来て居る、果の中に因があつて因の中に芽が出て居る、即ち果中因在り、因中果在りといふて兩方をチヤンと現はして居る。

それを徹底的に考へて行くと、人間と佛様の關係

が矢張り同じことになつて来る、一切の事柄が皆存在するけれども十界互具といつて「九界も無始の佛界に具し、佛界も無始の九界にそなはりて、眞の十界互具なるべし」と言はれてある、永久に此の宇宙には親も子供も存在して居つて、親は子を慈しみ、子は親に懐いて行くといふ實相がずっと續いて行くものである、何時始まつたといふことはないのである、その事を法華經は説いたのである、即ち子と親との關係であるから、子を吾々衆生とすれば、親は御釋迦様である、御釋迦様の親としての有難いことと、吾々の子としての子の尊い意味合ひを徹底的に説いた所のものが妙法蓮華經である、人を除き佛を除いてしまへば妙法蓮華經は因もなく果もなくなくなる、親と子といふもの、外には何もない、因と果の外には何も存在するものではない。その兩方を携へて居る、之を諸法實相といつたり、宇宙といつたりする言葉で謂ふのである、宇宙といつても決して衆

生と佛との外に存在するものではない、諸法といつても佛と衆生の外に存在するものではない、だから實質から言ふたならば子と親と考へたならばそれで宜いのである。

さうすると法華經の個々に就ての教といふものは細かいもので長いけれども、一番大事なことを言ふと吾等衆生一切迷へる者、子としての吾等はどういふものかといふと、それは「一相一味解脱相離相滅」と斯う説かれた、それは何をいふかといふと、この子である一切衆生といふものは一相一味である、一相一味といふことは同じ姿で同じ味である、小さく觀れば人間でも善人悪人、男女といふものに分れるけれども、本當に之を見通すと同じ姿のものであり味ひも亦同じ味ひのものである。それはチヨツトした所は違ふかも知れぬ、妙な酸いやうなお婆さんもあれば、非常に甘いやうなお嫁さんがあつたりするかも知れぬけれども、本當に嚼締めると人間の

味あじといふものは皆みな同じものである、それはどういふ味かといふと、飛と切り上等じやうとうの甘あまみ味だといふ、それが法華經ほふけきやうである、それが實じつに有難あつかひい所である。あゝいふお婆おばあさんならば酸すいからうと人は言うても、法華經ほふけきやうの佛ぶつ様から證明しやうめいされる所は、上うへつ面めんは少し微ちひが生なえて酸すいやうだけれども、そこを削けつて取とれば何なんとも言いへない甘あまいものだといふことが證明しやうめいされる、如何いかなるものでも甘あまいものだ、一切衆生いっせしゆじやうは一相一味いっさういゝみである、その一相一味いっさういゝみは何か、それは能よくく之これを見通みとおすといふこと、それから能よくく嚼かみ締しめるといふこと、二つである、能よくく見通みとおして能よくく嚼かみしめると一切衆生いっせしゆじやうといふものは解脫げだつ相離さうり相滅さうめつ相である。

解脫げだつ相さうといふことは、どんな親爺おやぢもお婆おばあも縛しばられて居ゐるのを解げいて呉くれ、解げいて呉くれては困こまるなんと云いふことはない、牢ろうに入いれられて居ゐる人間じんげんは牢ろうから出でして呉くれといふが如ごとくに、一切衆生いっせしゆじやうといふものは皆みな所謂すゐらう苦くしみ煩悶はんもん懊惱おうなうといふ苦痛くつうより解脫げだつせんとす

れ、ば居ゐ眠ねりは直すぐ破やぶられてしまふ、碁ごを打うつて居ゐればまた差支さしあへが出来できるといふ譯わけである、その解脫げだつといふものは所謂すゐらう瞬間しゆんげんの解脫げだつ、途中ちゆうちゆうの解脫げだつ、間諛まげんつき解脫げだつといふものになるから、それは可哀あはれさうなものである、眞まことの解脫げだつを得えさせなければならぬ。

離相りさうといふことは離はなれんとする姿すがたで、此この離はなれたいといふのは罪惡ざいあくに就つて謂いふのであるが、誰たれも悪い事ことをして居ゐりたいと思おもふ者ものはない、成なるべく悪い事ことからは離はなれたいと思おもうて居ゐるけれども、それが習慣しゆくわんの惰力じゆりきに依よつて離はなれ切きれないのである、人は何なんれも善人ぜんじんとなりたいたいと思おもうて居ゐる姿すがたに於おては一つである、どんな兇暴きやうぼうな殺人犯ざつじんぱんの強盜きやうたうでも、「お前は善人ぜんじんになりたかはないか」、「善人ぜんじんになりたい」、「何故なにがならぬか」といふと、「外そとに出ても錢ぜにがないから……」、「食くひたいものが食くへないから……」、「それを食くはして呉くれ、ば泥棒どろぼうはしないか」といへば、「それはしない」といふ、決してどんな兇暴きやうぼうな者ものでも此この惡あくより離はなれたくない

る希望きやうぼうに於おては皆みな同じである、その行き方が分わからぬから、酒さけを飲のんだら解脫げだつするだらうか、或あるはダンスをやつたら解脫げだつするだらうと思おもつて跳はねたり飛とんだりするけれども、それは本當ほんたうに解脫げだつする方法はうほうも知らない者もので可哀あはれ相さうな者ものだといふことになる。その解脫げだつせんとする考かへに於おてはその姿すがたは一つだ、堂々どうどうと自動車じゆうしやに乗のつて行く者ものも、尻振しりふりダンスをする者ものも解脫げだつせんが爲ためであり、道學先生だうがくせんせいが見臺けんたいを叩たたいて居ゐるのも皆是みなは同じ姿すがたであると佛ぶつ様さまは觀かんられた。佛ぶつ様の仰おんがしやることは非常ひじょうにえらいものである、是こゝは親爺おやぢが奥おくの方はうで碁ご盤ばんをバチ／＼やつて居ゐるのも、その子供こどもが三十錢貫さんじゆせんくわんつて活動寫真くわつどうしやせんに行くのも、或あるは下女げによが臺たい所ところで居ゐ眠ねりして居ゐるのも、それは皆みなその者ものの者ものの苦くを解脫げだつせんとして行く所ところの姿すがたに外ほかならぬ同じものである、大觀たいくわんすれば皆みな一つである、併ひししそれを中途半端ちゆうはんぱんに止めずに本當ほんたうに解脫げだつさしてやらなければならぬ、中途半端ちゆうはんぱんの解脫げだつ、居ゐ眠ねりして居ゐつて手を叩たたか

といふ者ものはない、それに法ほふを以もつてしそれを導みちびいて行いきさへしたならば、悉ことごとく離相りさうの姿すがたである。

滅相めつさうといふのは更に進すすんで總まての罪つみ、總まての曇くもりを取り除のくので、心の塵心ちんしんの曇くもりを除のくことを謂いふのである、皆人みなひとの心こゝろは明鏡めいけいの如ごときものであるから、それを曇くもらして居ゐるものをなくさう、是こゝも亦誰またたれしも考かんがへる所ところである、智慧ちゐえの側がはからも慈悲じゐいの側がはからも有ありる側がはから、お前は馬鹿ばかじやといふと、馬鹿ばかはさらひちやといふことになる、智慧ちゐえの妨さまたげになつて居ゐるものを取とつて除のかう、慈悲じゐいの妨さまたげになつて居ゐるものを取とつて除のかう、その鏡かがみを曇くもらして置おきたいといふ者ものはない、唯ただ低ひき欲望よくぼうの爲ためにそれを妨さまたげられて居ゐるに過ぎない、能よくく教おしへて之これを導みちびけば、さういふ心の妨さまたげをなすものは皆滅めつしてしまひたい、さうして皎々きやうきやうたる月の輝かがやくやうな人間じんげんになりたいといふことを考かんがへて居ゐる、是こゝが即すなはち子供こどもの方に就つての言葉ことばである。さうしてそれを世話せわをやいてやらうといふやうに

助力して下さる所謂慈悲を御與へ下さるのが親である。佛様であります。その二つの關係が始めなき以前より何時も續いて居る、一方には解脫相離相滅相を取つて上つて行かうとする、一方にはさうしてやりたいと力を添へられるものがあつて續いて行つて居るものである。その事を壽量品の次に分別功德品に於て説かれた、能く此の天地の有様を見ると皆佛様が御座つて多勢の者を御救ひなされつゝあるものである、佛は常に慈悲の光を放ち、衆生は常に渴仰の手を合せて進んで來て居る有様のものである、それが眞の實相であるとしてその事を明瞭に御説きになつた。之を一言にしていへば佛性があるとするういふのである、佛性を分けければ解脫相離相滅相である、上を眺めればさうしてやりたいといふ大慈悲の本佛在せり、此の親と此の子が常に相向ひ合つて、互に一方は教はんとし、一方は憶れて之に向つて行かうとして居る、一切の草木も陽の光を望

んで陽の方に向いて行く、總ての草木は必ず裏表があつて、陽の光線の方に向つて表の方がすつと向いて行くが如くに、假に曲つた方に葉があつて植木鉢の如くに置き所が違つて居つても、一週間も経たうものなら皆陽の光線の方に向いて居るが如くに、人間も矢張り本佛の有難さの光に觸れさせて置けば、如何に頑強な者も一週間十日と経てば皆本佛の方に向いて行くものである、矢張り草木は陽の光に向つて轉ずるが如くに、如何なるものも太陽の光に向つて轉ぜざるものはない。その宇宙に於ける姿をそのまゝ家庭に移して來れば、子は衆生の佛に向ふが如くに所謂解脫相離相滅相の憶れを以て親に憶れて行くのである、親はどうか子供の苦しみを解いてやりたい、心の曇りを取つてやりたいと佛に代つて、小さいけれども自分の子供に對して居るのである。之を國家に持つて行けば、我が皇室の如きは國民の上に矢張り解脫相離相滅相の働きをなさるものである、

此の大原則を確立して、それがもう何ものにも破られないといふことになれば、それが法統を愛護するといふことに變つて行く譯なんである。それを唱へ言葉にすれば「南無妙法蓮華經」と申して居る、この南無妙法蓮華經といふ言葉を吾々の方から言へば、解脫相離相滅相を持つ一切の衆生であり、佛の方からは之を得せしめんとする本佛の慈悲といふことである、この信念を持續して居るものが南無妙法蓮華經と唱へて行くのである、さういふ風に解釋して居ないものも或る方面にはあるけれども、今私が言ひ居るのが一番本當の正脈法統の愛護として法華經の大精神を解り易くして御話して居るのであります。

それでありますからさういふ結構な一切衆生の救はれて行く有様を本にして、それを法華經といふ名に結んで傳へられて、之を顯本法華と申して居るのである。日蓮聖人は命懸けを以て之を護られ、日什

上人、日經上人皆身命を差出してこの法統を擁護せられた、近代に於ては私の師匠兄玉日容上人の如き、又小林日至上人の如き非常な艱難の生活を送られてこの法統の擁護に盡されたのであります、私も不敏ながらその一部分に加はる光榮を有する者でありまして、今後生命が長らへますれば尚ほこの法統の發揮に向つて努力致したいと思つて居ります、不幸にして壽命がなければ致し方もないと思ひまして、後繼者の青年有志の人には、約十名程の人を選んで、どうぞこの法統正脈の擁護といふことを忘れぬやうにして貰ひたいといふので時々寄つて話合つて居る譯でありますから、私が遷化しても直に法脈が斷絶することはありませぬ。色々似たり寄つたりの話をして居る者も日蓮門下の中にはありますけれども、私としては有ゆる著述に於て、又講演に於て、今申上げたやうな意味合は一貫して居るものである、決してその時限りの意見を申上げて居る譯

ではないのであります、尙ほ一度の講演では御分り
にならぬ人もありませうけれども、幸に速記があり
ますから、是は一二ヶ月の内には統一雜誌に掲載さ

れます、どうぞ執讀玩味せられて、法統愛護のこと
に一段の御努力を希望する次第であります。(了)

實生活との關係より見たる佛教 (前篇)

大僧正 本 多 日 生

一、緒 言

「實生活との關係より見たる佛教」と題して、吾々
のこの世に暮して行く實際の生活の仕方の上に、佛
教がどういふ關係を有つて居るかといふことを話し
て見ようと思ふのであります。

この問題に就ても確に二つの大きな誤解が横つて
居ると思ふ。一つは佛教徒自身が佛教を誤解して居
ることであつて、佛教の信仰に目覺めた生活、即ち

發心をした場合に於ては、實際生活から懸け離れた
やうな行き方をしなければならぬもの、如く考へ
た、眞實佛教を信する者は遁世主義の如くに、世の
中を捨て、山に登るとか、商賈を廢めてしまつて廻
國巡禮をやるとかいふ風な特殊な生活、普通の士農
工商の生活でなく、千ヶ寺詣りをして居るとか、山
の中へ隠れて行をして居るとかいふやうな生活が佛
教の信仰生活であると考へて居る。又一般の僧侶の
生活でも、普通人の生活ではないと考へられて居つ

た事が多い、その中に殊に極端な考へ方の者も出
て、所謂超世間、超倫理といふやうに人間の生活か
ら超越する、人間社會の善悪から超越するといふや
うなことになる。さうなると佛教の生活とい
ふものは非常に人生生活には縁の遠いものになり、
極端に言へば人生の生活を破壊するものになるとい
ふ風に考へられて來る譯で、信心に入つたら夫婦の
關係も無い、女房を放つたらかして夜逃をして家を
出でしまふ、「それは信心を始めたのだから仕方がな
い、信心せぬ前ならば他所へ行くには葉書の本も
出して斷らなければならぬけれども、俺は發心をし
たのだ、モウお前等のやうな俗物とは何の關係も無
いのだ、いよゝ 佛門に入つて高野の山に登つた
ら、誰が訪ねて來たところが會ひはしない」、斯うい
ふやうに實際の生活とは絶縁してしまふことが佛教
の生活だと考へられた。後に殘された者もそれで諦
めて、一家の親父は發心をしたから訪ねて行つても會

つては呉れまい、會ふたつて物も言うて呉れまい」と
といふやうなことに考へられて居る所に、佛教とい
ふものが非常に抹香臭いものであり、迂遠なもので
あり、役立たないものであるといふことになる。だ
からさういふ發心をするのは、或は人殺しをしたと
か、世の中に顔出しも出來ぬといふやうなことから
發心する人が多い、或は子供の愛着に執はれて居つ
た者が一人の子供が死んでしまつた、「モウ慾も得も
義理も人情もあつたものではない、いつそ世の中を
火を放けて焼いてしまはうかと思つたけれども、そ
んな事をして仕方がないからア發心して高野の
山に行かう」といふやうな場合で、一種特別な極端
な生活を意味して居るものゝやうに、大分廣い範圍
に考へられて居るのであります。併ながらそれは全
然佛教を誤解して居るもので、さういふ極端な生活
をお釋迦様は攻撃したのである、佛教以前の波羅門
の生活がそれであつて、外道波羅門と言はれて惡魔

の如くに佛から罵られた行き方がさういふやうなやり方なのであるから、そこを履違ひせぬやうに考へ直さぬと非常な間違ひが出来ると思ふのである。

モウ一つは一般人の生活の基準が少し變なものであると思ふ、實際生活と言つたならば所謂物質の生活を基準に置いて居るといふやうなもので、商賣のことで、夫婦のこと、天麩羅を食ふこと……といふやうな風になつてしまつて、實際生活といふものが餘りに低級に考へられて居る點に大きな誤解があると思ふ、それが果して人間の生き方であるかどうかといふことを、モウ少し落着いて考へて見なければいかぬ。人間の生活方式といふものはどうあるべきものか、それにはそれ／＼の學問も出來て居る今日であるから、チョット耳を傾ければ人間の生き方といふものはわかつて来る。併し多くの世の中に彷徨いて居る輩は、その實際生活と言つて居るものが非常な墮落したる低級なる迷へる生活であるが故に、それ

と佛教とは非常に縁が遠くなつて居る。一方は人生を超越して山の中に逃込むやうに考へて居る、一方は墮落して混濁の中に落込んだやうに考へて居るから、この佛教と實際生活の間の距離といふものが、双方から非常に縁の遠いものに考へられるのである。

そこで完全に實際生活と佛教といふもの、關係を味はうとするならば、實際生活の墮落して居るもの、水平線をモウ少し正しい意味に上げて、佛教の誤解せられて居るさういふ婆羅門式の生活を矯正して、如來の教へ給ひし正しい意味の生活に戻すと、ピッタリとこれが合致して来る。佛教こそ本當に人間のこの世に處してこの世に生きて行くところの指導を與へたものである、佛教の信仰に依つて生きるこののみが本當の正しい生き方である、これを信じない者は墮落の生活である、これを誤解して居る者は婆羅門の生活である。始終お釋迦様が口を開けば

ないことだと思ふ。

二、正しき生活

この兩極端を攻撃されて居る、釋尊が第一回の説教を波羅奈に於てなされた時もそれを目標にせられた、我は中道を歩むものである、婆羅門の生活は禁欲の生活、厭世の生活であつて、この實際生活から餘りに離れてしまつて居るところの間違つた生活である、普通人の生活は五慾に惑溺して居るところの所謂凡夫着慾の生活であつて、却つてそれが爲に苦み悶えて居るのである。この凡夫行の墮落の生活と婆羅門行の厭世の生活を矯正して、そこに正しい中道がある、そこを歩んで行けといふことを説かれたものが釋迦如來の第一回の説教である。それからその意味がだん／＼整頓されて法華經となり涅槃經となり、そこに現れて居るものが佛教であるから、そんなくだらない坊主が考へたやうな悲觀厭世のものでもなく、又墮落の生活者が彼此れ言ふことの出来るやうなさういふ粗末な教ではない。自分の誤解を根本にして佛教を批判するといふことは洵に情け

然らば正しき意味の生活といふものはどんなものであるか。これは今日學術の上に於て論究されて居る通り、どうしても人間は物質の生活だけでは正しい生活とは言へない、物質の生活といふのは人間の肉體の慾望から起ることに目的を置いて、それが爲に一切の行動が支配されて居る場合を言ふのである。肉體から起る慾望は食物の慾望と異性の慾望、その他まだそれに附随していろ／＼起つて來ますけれども、大體その根源は、着物を着て居るとか指輪を嵌めて居るとかいふのでも、多くは異性の慾望から來て居るのである。男同士になつてしまへば、着物は汚れ、尻切れ半纏になつて居つても平氣の平左である。女もその通りで女ばかりになつてしまつたならば、浴衣の洗晒しでも平氣の平左である、髪を

結へと言つても結ひはしない、面倒臭いといふことになる。それが綺麗に髪も結ふし、白粉を付けて居るのは異性が居るからである、さうすると着物の美しいのを着たがるとか、いろ／＼さういふ事の爲に浮身を糞すといふのも、根源へ戻すといふと胃袋と異性慾の關係から來て居るものである。これは生理的の慾望で肉體から來て居る、非常に強い慾望のやうだけれども精神ではない、精神はさういふ生理的關係から刺戟されて働いて居るものである。

だから先づこの二つの慾望を胃袋の方で代表さして考へて身ると、胃袋に病氣がチョットあつたならば、何にも物を食ひたいといふ考が起らない、胃に一種の病が起つた爲に食慾を拒絶するやうな病氣があります。胃が萎縮してしまつて、三日経つても十日経つても何にも食ひたくない、「何にも食はなければ死んでしまふぢやないか」「死んでも欲しくくない」といふ所まで行つて、到頭胃が萎縮して死んで

ては考へて居る、それは全部胃袋に依つて支配されて居る。そこで金が無くては胃袋の要求に應ずることが出来ないものだから、一生懸命働いて錢を儲けて、錢が出来たら胃袋の要求に應ずる、生活問題々々々々とかましく言うて居るけれども、その生活といふことは胃袋の生活問題である。符籙を附ければならぬ、人間の生活問題ではない、胃袋に依つての生活問題である。だから馬鈴薯とかパンとかいふことになつて、パンを與へよ、パンを與へよといふ、皆胃袋の問題である。

ところがこれでは人間の生活とはならないといふのが學問上明かに論究された事であつて、それは動物の生活である。動物はモウ全くそればかりで、寧ろ彼等の方が先生である、犬なら犬がノソノソ歩いて居る、「お前何處へ行き居る」、「何處へ行くといつて別に外に用事は無い、何か食ふ物はないかと思つて探して居ります」……といふ譯で、彼等は夜でも

しまふ、三十日ぐらゐは何も食はないで居つて遂に死んでしまふ。だから人間が無暗に天麩羅が食ひたい、壽司が食ひたいといふやうなことを言ひ居るのは、これは胃の性質から來て居る、何故に甲は天麩羅を食ひたがり、乙は蕎麥が好きかといふのでも、これは生理的に研究したならば、胃の性質に依つて、脂濃いものが好きだとか、或は奴豆腐が好きだといふことが出て來て居る譯であつて、ナニもその人の精神に關係あるものではない、肉體の組織に關係があるものである。だからその慾望は全然肉體的慾望であり、物質的慾望であるが、それが爲に目標を置いて、「何でも錢を儲けて美味い物を食つて遊んで……」といふことが先づ一般の行動を支配して居る。そこらを電車に乗つて飛び歩いたり、淺草公園をまご／＼して居る人間を考へて見たならば、「彼店へ入つて壽司を食はうか、彼店へ上つて鰻を食はうか」といふやうなことばかり、藁口を出して錢を勘定し

書でも熱烈なものである。異性の慾望でも熱烈なもので、獸慾と言ふくらゐだから、犬などはそんなでもないけれども、脂肪積みたいなものになつたならば、随分猛烈な慾望を有つて居つて、何千といふ女房を一匹で持つて居るといふやうな奴がある、さうして他の牡が來て冗談事でもしようものならば食ひ殺してしまふ、随分嫉妬のえらい奴が居る。人間にはまさかそんなのは居らぬけれども、又それに似たやうな考で斬つたり撲つたりし居る譯でありますが、さういふ事で生活して行くならばこれは動物と人間と少しも違はないのであります。

近來は非常に性慾とか愛慾とかいふことを價值づけて居るけれども、それは手前味噌であつて、理窟を附ければ何にでも理窟が附く譯だけれども、人間がさういふ愛慾、性慾といふことに依つて一切が支配されるならば、人間の價値は無いといふ議論の方が、學問上ではどうしても勝つ譯である。實際とし

てどつちが宜いかと言つて手を舉げさしたら、墮落した奴の方の多いから、その性慾論の方へ賛成々々と言ふか知らぬけれども、併しさういふ大切な問題は數を以て決定することは出来ない。數を以て決定して宜いといふことになつたならば、「一生懸命働いて食ふのが宜いか、のらくらして錢が無くなつたら泥棒して食つた方が宜いか、どうちや」と言つたならば、「それはのらくらして飯が食へる方が宜しい」といふことになる、そんな事は多數を以てやるならば悪い事が幾らでも成立つものである。近來の如く多數なるが故に正しいといふやうなことは、何等の根據の無いことである、チョット墮落すれば皆悪い方へと賛成する、不良少年が何萬人と東京に居る、それを集めて聞いて見る「お前達、働いて食ふが宜いか遊んで食ふが宜いか」、「それは遊んで食ふ方が宜い」と言ふ「遊んで食へばデキに金が無くなつて困るぢやないか、掻搦ひが宜いか、商賣勉強する

が宜いか」、「それは掻搦ひが宜い」、「火を放けた方がモット美味い物が食へるぞ」、「それちや火を放けろ」……幾らでも悪い事には共同一致、一人の反對も無く、満場一致でやれる。物が狂つて来て、だん／＼低級になつた者の満場一致ナンといふことは何の價値も有るものではない、今はそんなことである。政治や何かもやり居るけれども、だん／＼世の中が低下して行つた時分の満場一致ナンといふものに價値の無い事は無論であつて、實に愚にも附かぬものである。モウ少し物事の條理に依つて考へて行かなければならぬ。

そこで人間としての價値は、胃袋に支配されて居つては駄目だといふことはどうしても考へなければならぬ、人間は高等なる精神生活を營む所に價値があり、そこに目覺めたる生活があるのである。

その精神生活の内容はどんなものかといふと、一つは道徳的な意味を有つものである、折角人間に生

れたから何か善い事をしなければならぬといふ立場から考へれば、親としては子の爲に相當盡して、子供を教育もしなければならぬ、財産も拵へて置いてやらうといふ風に、その子の爲に盡すといふことがあつて親の道徳生活といふものが開かれて來る譯である。夫婦の間にもやはりその通りで、唯自分の慾望を満す爲に亭主は女房を買つたのである、女房の方から言へば自分の慾望を満す爲に亭主があるのだといふことになれば、チョット亭主が病氣にでもなつて慾望を満さぬといふことがあると、「こんなものは私の目的に副はない、不用に屬するものだ、棄てしまつた方が宜い」といふことになる。併しさうではない、夫婦の關係もやはり道徳的に考へられて、夫は妻に對する道徳を行ふことを以て一番大事なこと、考へて、妻を愛し、妻をして幸福ならしめるやうに、妻からも夫に對して道徳觀念を以て交はるといふことでなければならぬ。今のやうに男女

の關係は性慾を根本とするといふやうな事はかなり高調して、「オーキにさうだ」と言つて居るのは實に羞かしいことである。昔の人はそれを羞かしいものと思つて居つた、現代人はそれを羞かしいといふことも知らないほど低級になつて居る。性慾といふものも男女の關係の間には起るものであるけれども、それよりも相互の間に道徳的交渉を開く所に夫婦の生活といふものはある譯である。

それをだん／＼擴げて考へて行くと、人間は自分の胃袋の満足のみ一生を捧げてはつまらない、腹が減れば食はなければならぬけれども、そんな事はさう大きな問題ではない。この自分の力を以て、成べく廣い範圍に永い影響を貽すやうな事をやつて行きたいものであるといふところの、道徳的の目的に於て人間が生きて行くといふことで、茲に精神生活といふものが開かれて來る譯である。

ところがそれはなかく辛いことがある、道徳生

活の難點でも謂ふべきものは、克己復禮といつて、己れの慾望を抑へて善い事をしようといふには、始終戦ひの状態に置かれて居る、卑しい希望を抑へつけては善い事をして行くのである。だから朝も眠たいと思ふけれども起きなければならぬといふので戦をして居る、日暮になれば遊びに行きたいと思ふけれども「イヤ行つてはいかぬ」、「行きたいナ」行くな……といふ譯である。天麩羅屋の前を通ると食ひたくなる、けれどもそれを食ふよりも早く歸つて本でも讀まうといふやうに、一々そこに戦といふものが起るから、道徳生活といふものは非常に骨が折れる譯である。

そこで宗教生活といふものがどうしても必要を感じて來るのである。宗教生活が道徳生活と違ふのはどうかといふと、己れ自身が非常な幸福感到に満ちる、又己れが救はれることに於てそこに餘力を生じて、その上に善を行ふといふことになつて來るので

うて隠したり抱いたりするやうな事をやつてまごついて居るのである。そこに非常な相違を生ずるのである。日本の文明に於ては宗教を特殊なものに考へて、道徳の生活が尊いのだ、正しいのだと思つて居る所に、日本文明の間違ひがある。どうしても道徳の生活では事が足らないのである、宗教の意味を加へたる道徳生活でなければならぬ。宗教は道徳を拒絶するのではない、救はんとするところの目的は一つだけけれども、自分の方が十分に救はれて而して人を救ふといふことになつて居る、そこに宗教的精神生活といふものが開かれて來るのである。

さうすると物質生活だけでは無論人間の生活でない、道徳生活は人間の生活といふことが言へるけれども、實際の上に効力が少ない、非常に骨が折れてさうして實行の乏しい生活である、宗教生活にまで來れば自分も救はれ人も救ふ力を生じて來るものである、所謂理想的の生活が開かれて來るのであるか

ある。例へば水に溺れる人を救ふといふには、先づ自分が水に能く浮くやうに稽古する、モウ何の力を加へなくても水に飛込めば身體は自然に浮いて居る、さうして泳ぐにも腕一本あれば泳いで行ける、さういふ樂な身體になると、今度空いて居るところの足なり腕なりを以て人を救ふことが出来る。船に乗つても船に酔はない人間になつて置けば船の中で仕事が出来来る。ちようござういふ風に、水を泳ぐには水の中に居る事が少しも苦痛でない、放つて置いても自然に身體は浮いて居る、腕一本あれば思ふ所に泳いで行ける、一里泳いでても疲れぬといふ境界を宗教は先づ先に與へるのである。船なら船がどんなに揺れても酔はぬといふ訓練が前に與へられて居る、随つて人が水に溺れて居れば救ふことが出来る、道徳の方はいきなり「善い事をせよ」と言つて、水練をしない者に人を助けると言ふ、自分一人が泳げない者が人を抱いて居るから、兩方がプー／＼言

ら、結局すれば正しい生活といふものは宗教的生活の一つが残る、餘は不完全なる生活といふことが言へると思ふのである。

さうして宗教的生活は道徳的生活を包括して居るのは言ふまでもない、たゞ前後があるのみで、無論善を行はしめんとする爲に宗教の生活といふものがあるのであるから、宗教の精神生活の中には道徳生活を包含して居る。のみならず宗教生活は物質生活を否定するものでない、それは謂ふまでもなく、身體がある以上は身體を殺してしまつては何も出來ないのだから、身體の正當なる要求といふものはこれを認める。たゞ惑溺することを許さない、我儘を許さない、食ふことの爲に一切を犠牲にするといふやうなさういふ顛倒したる生活は認めないけれども、食物を要求するに對して食物を與ふべきものは與へる、男女の慾望といふものも節制はしなければならぬけれども、これを無視するものではない、その他

の慾望もその通りで感溺を禁するのである、愛着を禁するのである。之れを愛するといふまでは差支ないけれども、着と云うてそれに精神を執はれてしまつて眼が眩んでしまふといふことを許さない、その點を能く考へて置かなければならぬ。宗教の生活が道德を否定するとか、物質を否定すると思ふ人があつて非常な間違ひを起すけれども、さういふことあり得べきものでない、この問題は簡單なことである。宗教が人間の善を行ふのを否定して悪人を造るとか、宗教が人間の飯を食ふのを否定して干乾にするとかいふことを考へ得るものではない、そんな事は誰にでもわかる譯である。馬鹿でも人間が飯を食はなかつたら死ぬといふくらゐの事は知つて居る、人間が善い事をしないで信心したつて何になるものではない、或る特殊の馬鹿がそんな事を言ひ出したものであつて、やかましく論ずるまでもないことである。

そこで先づ正しき生活は今言ふ精神生活であつて、而もそれが宗教的に目覺めたる信仰中心の生活、それに依つて道德生活も開かれ、物質生活も處を得て満足して行く生活、そののみ一つが本當の生活である。單に物質の生活、單に道德の生活と云うて居るものは不完全な生活であつて、折角人間に生れて居りながら生活の方式を知らないものである。そんなものが佛教とどういふ關係を取るか取らぬかと言つても、向ふが間違つて居るのだから少しもそれ等は參考とはならないものである。正しい人間の生活に於て、その實際生活は佛教とどういふ關係を取るかと言へば、ピツタリ即したところの生活が佛教に依つて導かれる譯である。

三、佛教の精神生活

(イ)、宗教生活

佛教は精神生活と物質生活及び道德生活、孰れも

整うた教を興へて居るのでありますが、その中に於て佛教の精神生活の中の先づ宗教生活はどんなものであるかと言へば、これが非常に優れて居る、そこに佛教の價值があるのであつて、それは非常に悦びの意味合を明かに教へられたものである。美人を得て喜ぶとか、御馳走を得て喜ぶといふ物質的の或る物を興へられなくとも、人間に生活して居るそこに何一物をも興へられずして悦びがあるのである。身體は素裸で空手で居つたならば、普通の人は「彼は何も持つて居らぬ、乞食でも割れた椀ぐらゐは持つて居るけれども、彼奴は椀も持つて居らぬ」と言ふだらうけれども、佛教は一物を持たないところの人間に廣大無邊の悦びを興ふるものである、それが人間の生活を導く根本である。佛教の信仰に至つたらば、素裸は素裸の儘でそこに大満足を謳つて居るものである、人間はそれでなければいかぬ、もと／＼裸で生れて來てオギアと泣いて乳が欲しいとい

ふくらゐのものであつた、それがだん／＼成長して大きくなつた以上は、自分の身體があつたならばそこに満足がなければならぬ「俺は何も無い」と言つてワン／＼泣く、そんなものではなからう。そこを佛教では能く教へて居る、多くの人は指輪を落したと言つては泣き、着物が破れたと言つては悲しみ、家がなくなつたと言つては泣いて居るけれども、素裸で何物もなくなつた、無一物の境涯に於ても我は非常な悦びに生きて居るといふことではなければ、人間の資格は無いといふことを佛は説くのである、それは話が大きいからチョツトわかりにくいけれども、能く考へて見れば直ぐわかる。

それはどういふ譯でさういふ悦びがあるかと言へば、人間の生命の方から考へて來て居るものである、人間の生命といふものはズツと續いて行き居る、過去から未來へ續いて行く自己であること故に、この永い生活といふものを佛教は考へたのであ

る。生命は生々世々流轉を辿るものである、即ちいろ／＼の生活を繰返して来て居る、そこから考へると、六道流轉の巻に於てはモット／＼激しい生活を經て来て居る、それはどのお經を見てもさうであるが、法華經の譬喩品を見ても「常處地獄」とあつて大抵は地獄に居る、六道流轉の中でも地獄が長い、地獄の生活は百年や千年や萬年ではない、常處地獄といつて殆ど地獄の底詰りになつて居る。その年期が明けて今度餓鬼に出て來るといつても餓鬼の生活もなか／＼長い、ズット六道流轉の苦しみの程度と及び年限を考へて見ると、人間に浮び上つたといふことは、所謂三千年に一たび海面に浮び上る亀が浮木に遇ふやうなもので、非常な目出度い所にポカンと浮いて居るといふことがわかる。だから佛敎は、これはうまい所に來て居るナといふことを本當に味はして居る、今まで流轉を辿つて來たことを能く考へて見よ、それは蟒蛇になつたところで鱗の中に虫

がわいて夜でも晝でもチク／＼刺す、併しそこには醫者も居らなければ薬も塗つて呉れないのである、人間は腫物が出來ても醫者へ行けばサラリと洗つて痒みの止まる薬を塗つて呉れる、何を一つ考へて見ても人間に出て來た生活ぐらゐ幸福なものはないといふことが能くわかる譯である。それはいろ／＼の生活があるが、どれを見てもさうである。私はいろ／＼の事を考へて見る、鼠ナンといふものも氣樂なもの、そこらにある物を喰つて生きて居る、面白くものだと思つた、ところがこの頃夏になつて蛇が天井にやつて來る、さうすると鼠はガタ／＼と逃げ廻る、蛇の奴はノロ／＼行くけれども何處へでも鼠を追かけて行く、鼠の巢の中にまで頭を突込んで行くものだから、鼠は夜通しガタ／＼やつて居る。それを私は考へて見た、吾輩が鼠なりせばどんなものであるか、人間であれば蛇が怖いナンといふのは馬鹿な話である、石を一つ打つても死んでしまふ

が、偕て鼠になつたと言つたら石を打つけることも釋でどやすことも出來ない、さうして夜となく晝となく、警察官も居らなければ憲兵も居らない、強盜殺人犯が自由自在にノロ／＼とやつて來る、チアどうも、安眠することが出來ぬ、さうするとこれは苦しい境界だナと熟々考へる。戸外には川鼠が居つて、川の横に穴を開けてチヨイ／＼出て來居る、さうするとこの頃は蛇が幾つもの周囲に居つて日向はつこをして居る、鼠の奴がチヨット顔を出して遊びに出ようと思ふとニヨロリと來る、チアどうも鼠は随分吃驚する譯である、ちようど人間が外へ出ようと思つたら鬼が居つたやうなもので、ギユツと捕へられる。こつちいふ所を流轉を繰返して來て居る、その鼠の境界が一遍で済んでしまふ譯ではない、蛇に呑まれたと思つたら今度は又蜘蛛に生れて來るとか、蛙に生れて來るとかいふやうに、畜生の生活でも幾度も繰返すものである。

因果應報の理を以て考へれば、一たびさういふ境界に墮ちたらそれが浮び上るといふほどの善根功德を積む機會が無い、鼠が人間に出て來るといふにはどういふ機會に於て出られるか。大抵今までの書物に書いてあるのは、お寺の本堂などに鼠が棲んで居つて、和尚さんが一生懸命お經を讀む、それを佛前に供へられた餅を嚼りながら聽いて居つたから「如來壽量品第十六自我得佛來……ア、有難い」と鼠が思へばそれは人間に出て來られるかも知れぬと思ふけれども、「何か坊主がやつてるナ、早く向ふへ行けば宜い、あのお鏡餅を喰らうと思つて居るのに、朝早くから大きな聲で怒鳴りやがつて、あの坊主何を言つて言やがる……」斯ういふ料簡で居る鼠がどうも功德になるとは思はれない、「あ、美しいお經を讀んで居る、威心な和尚だ」と思ふのなら宜いけれども、さう思つて居ない證據を私はチャンと試験して居る、どういふ料簡で鼠が居るかナと思つ

て、お経を讀みながら磐をチーンと鳴らすと、鼠の奴が驚いてバット飛上る、それを見ると吾々がどうも本堂に居ることを嫌がつて居るに違ひない、それでは駄目である。多くの場合さういふやうな譯でなか、彼等が浮上るといふことは出来ない。餓鬼に行つても己れが腹が減つて居れば人を呪ふ、人間でも必ず自分が憐れな境界に落込んで居れば幸福な人に喰ひつきたいやうな気分になつて来る、さういふやうな料簡で出世が出来ると思へぬ、それを佛教では功德善根とは言はぬ。人を呪うたり、人を憎んだり喰ひついでやらうといふやうな料簡が燃えて居る以上は、又下へ墮ちる、墮ちる機會は非常に多い。餓鬼になつても地獄になつても悪心強盛にして減つて行かない、百遍で年期が明けるといふものならば、百遍に行くまでの間に又五百遍ぐらゐる墮ちる罪惡を犯してしまふ、今度五百遍になつたら又千遍ぐらゐるといふ風で、ズット苦しみ沈淪すべき

から天上界で花が萎みかけたら實に憐れなものである、ちやうど人間が年の寄りかけたやうな譯で、顔に皺が寄りかけた、髪が白くなりかけた、腰が曲りかけた、齒が抜けかけた、亭主が死んだ……斯ういふ工合に次々に間が悪くなつて、そのうちに火事に會ふ、息子が馬鹿で商賣は損をした、家は人手に渡つたといふやうな工合に、ズット衰へて行く有様が見えて居る、だからさういふ天上界などに行つて一時の幸福を夢みてもつまらない。下の方は一番人間に近いのは修羅だけれども、これは喧嘩ばかりして居る、あまり修羅の生活も有難くない、人が出會つて「お早よう」と言へば「ナニツ」と言つて突かゝる、「おのれツ」と言つて喧嘩を始める、無事に別れても、向ふへ行つた時分に後から足を引張つてドツと倒す、これではやり切れない、自分一人で怒つて居るなら宜いけれども、近所隣りが皆怒つて居るのだから餘り有難くないだらう。その次へ行つた

原因のみ多いやうに思ふ。實にそこを考へると人間の境界が有難いといふことがわかる。

人間の境界に於ては、辛い事があると云つても多寡が知れて居る、心得方に依つたならば人は善を行ふに於て最も良い位置を得て居る、それをお釋迦様は地獄の生活も説き修羅の生活も説いて、さうして人間生活の幸福であることを教へられた。佛教が厭世教だナンといふのは馬鹿が言ふことである、佛教ぐらゐる上も下も見えて居るものは無い。天上界が善いと思ふけれども、天上界は又天に五衰の愁ひ有りと言つて、その功德が衰へると今度は還墮三途で、ひつくり返つて地獄の底に墮ちる、だから天上界は一つも佛教では謳歌して居ない。人間があつたら幸福になると、善心も起らずたワフワフと浮いた調子に暮してしまふ、自分の積んだ果報を皆食ひ潰してしまつて、何等善根の力が無くなつた時分に引繰返つてドナンと三惡道の底に墮ちると書いてある。だ

ら畜生だが、畜生に幸福な畜生といふものは殆ど無い、馬とか狎とか言つたら餘程良い方だけれども、それにして見たところぐらゐるなら無いものである。

だから人間に生れて居るといふことの幸福を徹底的に考へさせたものが佛教である、他の教に、人間を禮讃すること佛教の如きものは一つも無い、それは例に寄ることも出来ないものである。生れ難き人界に生を享け、恰も三千年に一たび花が咲く優曇華の花よりも珍しい、三千年に一度浮び上る盲の龜が栴檀の浮木に會ふよりも珍しいと言つて、釋迦如來は人間に生れたことを禮讃し、お前は人間ぢやないかといふことを以て法を説かれて居るのである。そこをモット徹底的に考へなければならぬ、それを下手な坊主が、人間の世の中はつまらぬといふやうな事を言うたのはまるで行き方が違つて居る、釋迦如來ぐらゐる人間を尊く説明されたものは無い。そこから考へて行つて、人間の幸福といふことか

らその中に果報といふことを教へられて居るのであるが、その果報の中で人間が善い考になり得る果報といふものを釋迦は一番に取つて居る。普通の人は金があるとか、我儘に暮すとか、或は別嬪が嫁になつたとかいふやうなことを非常に幸福と思ふけれどもさうではない、己れの心が善心にはたらくといふことが人間に生れて居る果報の一番尊いものである、斯ういふことも能く教へたものである。己れの心が悪い方へと行くならば、どんな幸福のやうに見える身分の中にもだん／＼不愉快な事が起つて来る、心得が悪ければいろ／＼な事がそこに禍ひを爲して来る、所謂人格といふものが壞れて居るのだから名譽も無くなつて来るし、いろ／＼な間違ひも起つて来るし、混雑な人生が現れて来て、遂に夫婦の間で言へば女房も愛想を盡かして逃げて行つてしまふといふことになり、必ずそこに苦しみといふものが展開して来る譯である。心得が善いといふことに

なると、その心得の善い中から本當の幸福といふものが生れて出て来る、さうして永遠の生活を考へたら、その心得の善いといふことが己れを幸福なる方に生れさせて呉れるのである。心得の悪い奴は自分を地獄にやり、餓鬼にやるのである、人生の眞の幸福から考へ、永遠の幸福から考へて、己れの心が善い方へ行くやうな人間に生れたといふことが一番有難いことである、斯う考へて行くのである。だから今自分が佛法を信じ、善良な觀念になつて居る、信仰を有ち道徳心を以て、この清い生活を營むことが出来たといふことが、同じ人間の中でも一番の幸福である、その事は能く涅槃經などに於て説かれて居るのであります。人間は外部から幸、不幸を見るといふ間違つた觀念を有つて居る、さういふことはいかぬ、心の中に本當の幸福といふものを考へて行かなければならぬ。

の無い者は善い事を見ても有難く思はない、佛法を聞いても有難く思はない、その人が如何に賢くとも「その位の話が何ぢや」と斯う聽いてしまふ、何だ、人間に生れて幸福だとか、心の中に悦びがあるとか、お釋迦様がいろ／＼言うたとか、そんな舊くさい事をどうするのだ……」と言ふやうな人は、エライ賢いと思ふか知らぬけれども、吾々から言ふと罪障が深いのである。つまらない活動寫眞などをエラク感心して三十錢も出して見に行く、それがその人の上では非常に賢いやうに思つて居るけれども、心のはたらき工合がさういふつまらない方へと力強く行つてしまふのである。どうも今日の青年男女は罪障の深い人が生れて居るのだらうと思ふ、つまらない事に一生懸命になつて居るけれども、善い事を聴いても横を向いて欠伸をして居る、これは罪障が深いので、決して賢い人でも何でもない。斯ういふやうなことは所謂末法澆季と言ふか、濁つた泥水の中

に生活して居るやうなもので、くだらない事に頭を突込んで善い事を聴くことが出来ない。果報の善い者であつたら如来の正法を聽従することが出来る。だから今までの歴史に現れた偉い人の悦びは、やはり生れ難き人界に生を享け、値ひ難き佛法に値ひ奉つて、これほどの悦びがあるかといふことを皆言うて居るのである。それが人間に生れたことに何等の感興を有たず、佛法が世に存在して居ることなどは自己と關係が無いやうに思つて居るのは、その人の罪業の深き所であると思ふ。

それから尙進んで信仰の方に入つて行けば、佛様の護つて居られる事柄、いつも／＼佛は我等を憐んで我等を導いて下される譯である、ちやうど親が子供を思ふやうにいつも我等の事を御心配下されて、その大慈大悲の光が自分の頭に来て居るのである、太陽の光が我が頭上を照すが如くに、佛の慈悲の光明は我を照して下されて居るのである、盲者は日月

の光を見ることが出来ないが如くに、自分が信仰の上の盲目であるから佛様の光を拜し得ないのであるけれども、茲に信仰に目覚めたならば、佛の夜も晝も吾々を護つて下される大慈大悲の光明に觸れることが出来る。先づそこを自覺した者が佛教信者といふことになる譯である、佛様の護つて下される有難さを感じない間は佛教の信者ではない。それも亦やはり人間の性能の然らしむる所で、幾ら理窟を言うても、理窟ではそれがどうも有難いとは考へられな

餅が有難いと言へば忽ち食ひつく、實にさういふ人は可哀さうな人と謂はなければならぬ、つまらない物だけが有難く思へて、精神的の尊い光といふものに觸れる能力を有たない。それを恥ぢて、最初は無理にでも自分の心をそこへ／＼と引つけて、目を瞑れば佛様の有難い事が感ぜられるやうに、さういふ本佛の温かなる感應といふものが自分の身に應へて来るやうに、訓練しなければならぬのである。

思へ、自分で唱へて居るのであるけれども、これはお釋迦様が傍に来て仰しやるのである、佛の御口より聴くが如くに考へて、さうして吾々を護つて下さり居る、歴々と今題目の聲が耳に響いた、本佛茲に在ますと考へて有難く心を向けて行かなければならぬ。だから壽量品の大事な所はその事ばかり説いてある、「咸く皆な戀慕を懐いて渴仰の心を生ず」といふのはそれである、この意味合は自分が訓練するより仕方がない、戀慕と言つて戀ひ慕ふの心、渴仰と言つて水を求むる如く佛を憧れるの心といふものは、自分がこれを訓練しなければいかぬ、幾ら説教を聴いたつて、聴いただけでその情操といふものは動くものではない。だからさういふ眼に見えぬ佛ではあるけれども、實在不滅の如來を憶れる感情の動かぬといふものは、俺は下等な人間で、折角佛教に値ひながら佛を信じ得ないものである、人間として高等なる崇高なる感じを有たない俺は下等な人間だ

と恥ぢて、自ら信仰心といふものを訓練しなければならぬ。

然るに今日の教育を受けた者は「ナニ坊主の言ひ草ちや、俺はさういふものは有難く思はぬ」と言つて、蛙の面に水を掛けたやうなことを言つて居る、「俺は宗教などは信じない」と言つて居る、さういふ者は馬鹿者である。そんな事は人を俵つて知るべきものではない、所謂天賦の人間一性能として、宇宙の絶對者に對して、所謂仰いで天に愧ぢず俯して地に愧ぢずといふやうなことは、人間の高等なる感情としてどうしても養はなければならぬものである、何も宗教家の殊更に押賣を俵つて始めてさういふ事の必要を感じて来るのではない、その宇宙に對する崇高なる感情を有たなければ人間の心は磨かれぬといふものである。だから儒教の方でも天道明德の教といひ、日本でも敬神崇祖と言ふ、明治天皇はめに見えぬ神にむかいてはちぎるは

人の心のまことなりければ、仰せられた通り、人間の誠心といふものは宗教情操から開かれて来るのである、そこを佛教は本當に教へて居る、その本元である。

その精神生活は本佛の有難い事を感激する所に開かれて来る、その代り佛の有難さはスツカリ説いて居る、他の教のやうなボンヤリしたものではない、佛は斯ういふ親切な斯ういふ方である、何處から考へても有難く感激しなければならぬやうに説かれる、それが隠れて居る佛ではない、阿彌陀様とか基督教の天の神様とかいふやうなからくりではない、釋迦牟尼として人生に生れて来て、事實斯ういふ親切を現し、いろ／＼な實例を遺して居る、彼が阿闍世王に對して爲された親切はどうであるか、彼が鴛掘摩に對して爲される親切はどうであるか、或は橋戸迦といふ裸の女をどうして救はれたかといふやうに、一代に現れて居るその慈悲の有様といふものを

見ると「ア、どうもお釋迦様は左様な親切なえらい方で、而もそれが本佛として今も我等を護つて下されて居るか」といふことを感激するやうに出来て居る、それが一切教の上に遺つて居るのである。

それからモウ一つは自分自身の尊い事柄に移つて、この自分といふものが又非常な價値の有るもので、磨けば光る珠である、ウカ／＼して暮せば即ち寶の持ち腐れである。「貧女に寶藏なくんば何を以て開を論ぜん」といふ言葉があるやうに、乞食の女かと思つたけれども、藏さへ開ければ長者の女であつた、鍵の置き所を忘れて居るから乞食をして流浪して居るけれども、その鍵を以て藏の戸を開けさへしたならば、一舉にして寶は藏に満ちて居るものであつた。汝等はそれと同じ事である、自ら貧女と思つて乞食の生活に悶えて居るけれども、汝の心の藏を開けば一切の財寶は満ち溢ちて居るものであると教へられる、そこに實に悦びがある。人間生活の外から

来る品物は少ない、思ふやうな指輪が買へないとか、着物が買へないとか、そんな事を嘆く必要はない、汝の心の中にはそんな物どころではない、不滅の尊き寶が一パイ有る、それは佛様と同じ性質のもので、佛様が在ると言つても宜いのである、汝自身に佛のやうな美しいお相も具へて居れば、御力用も具へて居れば、佛のやうな大きな智慧も慈悲も何でも有るのである、佛は一切を具足して具はらざる所無き完全なる方である、その完全珠の如きものを人各々が有つて居る。而してそれを現すことが出来るやうになつたのが信仰決定の時の悦びである。

この尊き佛性を現すことは確定して居る、モウ間違ひない、縦ひ他の事が狂つても、この信念より来る悦びは狂ふことはない、天が地となり、地が天とならうとも、大海の水が干満が無くならうとも、陽は西より出ることがあらうとも、この佛教に依つて興へられた信仰の悦びが變るといふことはないとい

ふ、絶対的の確信を茲に立てるのである。それが遠くからなる何ものになることは無いから心配は要らぬといふ風に考へて、この大聖釋尊の法華經の御教を確信して、さうして吾々の佛性が茲に開かれて行くのである。無い物を新しく拵へるならば骨が折れるけれども、有る物を現すといふことは、或る一つの適當な方法さへ具つたならば直に得られる、電燈線に電氣が通つて居るのを、電球がチョット切れて居るとか、スイッチを切つてあるから光らないのだけれども、スツカリ揃うて居る所にスイッチを捻れば直ぐ光りが點く、自動車はどこも破損しては居ないけれども、たゞ車が向ふへ行かぬやうに齒止がないけれども、そのハンドルの機械をチョット動かせばしてある、そのハンドルの機械をチョット動かせば自由に車が動くが如く、吾々は佛と同じ破損しない機械を有つて居つて、齒止の機械の一部を押へて居るのである、それを法華經の信仰に依つてその押へてあつたものを離せば、絶対の佛が我に現れて來

る、それを確信することが佛教を信するといふことナンである。難かしい行をしてそれが爲に佛が出て来るといふ譯ではない、三十銭、五十銭の貯金をしてそれが一萬圓となるといふには非常に骨が折れるけれども、さうではない、藏の中に一パイ銭が入つて居るのを、藏を開けることを忘れて居つた、鍵を懐ろから出してガチャ／＼と開ければ一遍に長者になるやうなものである。法華經にはその譬喩がスツカリ説いてある、吾々が佛様に成り得るといふことは、貧女が寶藏の鍵を懐ろから出して長者になるのと同じ譯である、そこに悦びといふものがあるのである。さう困難なことはない、多くの努力を加へなくとも適當な方法に依つて、所謂妙法といふものに依つて、吾々の佛性が現する。本佛の慈悲に間違ひなく、吾々の佛性に間違ひなく、この感應に間違ひがないといふことになつて来る、洵に有難い事であるといふことから、その悦びが満ち溢ちて歡喜の生

活が開かれて来るのである。それが宗教の生活であつて、そこに同時に今度は所謂道德の生活が開かれて来る。(次號)

社頭雪 麗陽

千代を經し伊勢のみやしる雪つむは

天照神のきよめなるらん

鳥居まで雪ふみ分けて詣てしも

あと踏みかぬる清き姿に

山端の名もなきやしろけたかくも

見渡すかぎりつもる白雪

教報

◎東京統一團本部教報

陰慘な空氣の中に重苦しい氣持で就職難、經濟難、政治難、生活難等々次から次へを巻き起る不祥の歲昭和の五年も何うやら切り抜けて茲に昭和第六の春を迎へる事と成つた、今年には宗祖立正大師入滅六百五十年忌に相當する吾曹に取つては最も意義深い年である是が亦でもお互ひに何か一仕事やらざる可らざるの年である、我が統一團本部では一月五日午後一時より統一團を會場として先づ皇國萬歳の大國禮會を總裁大僧正本多日生現下の御座席を得て慶祝した、續いて新年宴會開催出席者二百餘名、初めに團員代表挨拶(若野少將)二、に總裁陛下は四十分巨り寺院創立の精神を明かにして我が法統の擁護を如何せん諸賢不情身命の願行に起たさるべからず、と訓諭し玉ひ、次で團員の五分演説に移れば小西日喜上人親々たる信仰の血を通して聖祖に報ゆる法統愛護の大寶塔を建立せざるべからず、今ぞその秋なりと赤誠を披露され次で中村清一氏、和實義見師、山田豊次郎氏、

山口智光師等の熱血の叫びの内に開帳、次で清興の珍藝百面相、御能狂言三張、に興を添へた、御能出演者は「やるまひ會」の伊藤利兵衛氏、梶野智水氏、中川純氏、成瀬愛平氏、山口多加志氏、稻本金一氏等、最後祝木願正師の閉會の辭に午後八時會を閉じた。當日役員左の如し、受付掛早川太吉氏、山田英二氏、村田顯明君外套預掛中村藤吉氏、村田顯明君接待掛中島すゑ子、安江久子、津田愛子、清水みさ子、土屋けん子、杉山かよ子、伊藤わか子、厚木秀子、佐藤文江子の諸婦、掛當掛根本正氏、木村聰八氏、進行掛野島連平氏、廣瀬調氏、餘興掛羽入田眞人氏、本田健二氏以上であつた。

當日は正月には珍らしい暖かさて天氣晴朗全く日本晴れと云ふべき日で一同和樂に過さて頂いたことを感謝する。

△一月十一日(晴) 統一團六年度初頭の日蓮主義の日蓮講演會午後一時午開會、初めに法要次で講演會に移る、「信仰と解脱」高矢文學士「人類の上に法華經は何を叫ぶか」梶木願正師、來會者七十餘名。

△同十八日(第三日曜)(晴) 午後一時より統一團、報恩閣、小松川立正會、市川立正會、

◎大阪堂閻寺教報

○十二月二十二日 堂閻寺開基常樂院日經上人の報恩會を修し 法華經の精神 京藤 布教師 堂に熱田木宮爾氏の感想談ありて盛會なりき。

○二十三日 住宅にて
受持文に就て 京 藤 師
○一月十一日 河邊宅にて
本佛の常住と常設 小 泉 師
傳なるかな信仰の力 京 藤 師
多数の青年參觀近來稀なる盛會なりき。
○十二日 堂園寺にて新年初會京藤山主導師
の下に國運の隆昌を祈り講演に移り
開會の辞 京 藤 師
正しき勝利者としての生活 川崎本山部長
終りて酒なしの新年會尤も淨く法悦歡喜に滿
ちた集りなりき。

○十二月三日 午後八時 高木 信行寺ニテ
宗教信仰の所以 藤 啓純師
○十二月六七日 鐵道講話 北陸線ニテ
鮮克有終 能仁 一十師
○十二月八日 佛教講演 本光寺ニテ
釋尊の成道 本郷常次郎氏
○十二月十四日 修養講話 金澤貯金局ニテ
越年の努力 能仁 一十師
○十二月十五日 音樂會 本覺寺ニテ
法華經の阿彌陀經 本郷常次郎氏
○十二月十六日 工場講演 錦華紡織ニテ
富元 會榮師
○十二月十三日 天晴會 渡邊港宅ニテ
靈波は動く 能仁 一十師
○十二月二十日 立正閣講演 立正閣ニテ
佛陀の壽命 藤 啓純師
○十二月二十九日 家庭講演 河合氏宅ニテ
三つの生活 能仁 一十師
信なくして實の山に入りし話 能仁 一十師

○十二月三日 午後八時 高木 信行寺ニテ
以和爲貴
○十二月十四日 鳥取縣下 日蓮信徒大會
本化佛教大觀 高田 日暢師
○十二月十五日 鳥取 日蓮各派互相實笑儀
死追悼會 高田 日暢師
○十二月十五日 鳥取 法泉寺
○十二月十六日 鳥取 法泉寺
○十二月十六日 鳥取 法泉寺
○十二月二十四日 鳥取吉方町 松本鐵治氏
靈肉兩方之救濟 高田 日暢師
(松本報)

北陸教報 「十二月」

○十二月二日 家庭講話 芳井町 若尾方ニテ
久遠のあこがれ 能仁 一十師
○十二月二日 午後八時 高木 信行寺ニテ
佛陀の本懐 藤 啓純師
○十一月十一日 午後七時 會津 妙隆寺ニテ
先聖の遺風 長 美明師
○十一月十八日 妙支講 福井 本經寺ニテ
衣室の三軌 長 美明師

○十二月十三日 鳥取 地明會

山陰通信

誌料領收

自昭和五年十二月二十一日至昭和六年一月二十日

東京府	鈴木伊之助殿	一金貳圓貳拾錢也	津山	玉置留男殿	
札幌	本澤隆正殿	一金拾五圓也	東京	山口智光殿	
大阪	岩見實太郎殿	一金貳圓貳拾錢也	千葉縣	平山三藏殿	
岡山縣	中井喜八郎殿	一金四拾圓也	横濱	和田吉殿	
仙臺	佐藤みつ殿	一金貳圓貳拾錢也	川崎	毛見春吉殿	
東京府	淺海てつ殿	一金壹圓也	大阪	廣野勇吉殿	
同	多田房太郎殿	一金壹圓貳拾錢也	名古屋	清水一乘殿	
同	聖成光尊殿	一金六拾錢也	東京府	有住千代殿	
同	清水龍山殿	一金五圓也	同	唱行會殿	
同	三谷芳一殿	一金四圓也	北海道	本郷常次郎殿	
東京	田中孝太郎殿	一金貳圓貳拾錢也	山梨縣	山本禮三郎殿	
静岡縣	山本通辨殿	一金壹圓貳拾錢也	管口	熊谷友枝殿	
埼玉縣	長澤知教殿	一金四圓四拾錢也	大分	大石千尋殿	
埼玉縣	高田貞彌殿	一金拾圓也	岡山縣	福島要藏殿	
鹿兒島	淡徳太郎殿	一金貳圓四拾錢也	大阪	福谷寛次殿	
大阪府	山田甚之丞殿	一金貳圓四拾錢也	愛媛縣	岡本忠道殿	
千葉縣	荒川てう殿	一金七圓貳拾錢也	同	三田常次郎殿	
名古屋	森法亨殿	一金壹圓貳拾錢也	東京府	笠間信壽殿	
奈良縣	森法亨殿	一金壹圓貳拾錢也	東京府	笠間信壽殿	
青森縣	柏木吾市殿	一金貳圓四拾錢也	宮城縣	内倉治吉殿	
朝鮮	濟野成支殿	一金貳圓貳拾錢也	名古屋	古市キヨ殿	
兵庫縣	魚角量吉殿	一金貳圓貳拾錢也	愛知縣	戸松あさ殿	
			兵庫縣	笹倉鹿太郎殿	

一金貳圓貳拾錢也
 一金五圓也
 一金壹圓貳拾錢也
 一金八圓也
 一金貳圓貳拾錢也
 一金貳圓貳拾錢也
 一金六圓也
 一金貳圓貳拾錢也
 一金貳圓貳拾錢也
 一金壹圓貳拾錢也
 一金參圓也
 一金貳圓貳拾錢也
 一金壹圓貳拾錢也
 一金壹圓貳拾錢也
 一金壹圓貳拾錢也
 一金貳圓貳拾錢也
 一金貳圓貳拾錢也

右雜有入帳仕候也

「統一」會計

岡山縣	羽田長壽殿
盛岡	中村謙藏殿
東京府	源成光尊殿
神戶	熊弁本光殿
廣島	鈴木豊吉殿
東京府	柳原覺次郎殿
大坂	堂開寺殿
同	河邊作太郎殿
同	徳永徳彌殿
同	徳永徳彌殿
大連	重松弘通殿
三重縣	伊東寛殿
大坂	富田清千殿
千葉縣	中村正次郎殿
大坂	福井治三郎殿
桐生	大澤イシ殿
鎌倉	野元盛幹殿

御注意五項

- 一、普通誌料は總て前金に願上ます
- 一、前金切御注意致し三ヶ月に及ぶも御拂込みなき場合は御入金迄御送本見合せます
- 一、集金郵便での取立てには誌料の上に金拾錢の集金料を添加致します
- 一、御照會には返信料を要します
- 一、御轉居の節は必ず新舊双方を御明記の上早く御知せ願います

絶好の機會!

大僧正本多親下最近の名著四種左の通り特價提供す
吉凶共に此等の贈答は自他の法益極めて甚大ならん
部數に限りあれば品切れとならぬ間に即時御申込あれ

- 一 法華經要義
定價 金 參 圓
送料 十 四 錢
- 一 日蓮主義心髓
定價 金壹圓八拾錢
送料 十 錢
- 一 日蓮主義精要
定價 金參圓五拾錢
送料 十 六 錢
- 一 日蓮主義本領
定價 金貳圓五拾錢
送料 十 二 錢

今月中に限り一部賣は二割引
十部以上十九部迄二割五分引
二十部以上四十九部迄三割引
五十部以上九十九部迄三割五分引
百部以上は特に破格割引 送料は實費を申受く

申込所 東京市外南品川町妙國寺内
「教」發行所 電話東京一〇九四〇番

一冊	金貳拾錢	送料五厘
半冊	金壹圓貳拾錢	送料共
一ヶ年	金貳圓貳拾錢	送料共
一ヶ年	金貳圓貳拾錢	送料共
一ヶ年	金貳圓貳拾錢	送料共

表紙一頁	金貳拾圓
一頁	金拾圓
半頁	金五圓
四分一頁	金二圓五角
五分一頁	金二圓

昭和六年一月廿四日印刷納本 (第四百三十一號)
昭和六年二月一日發行

不許複製

編輯兼 磯部滿事
發行人 鈴木日雄
印刷所 東京府荏原郡品川町南品川百八十一番地
電話高輪六〇二四番

發行所 統一發行所
編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ

目次

- 實生活との關係より見たる佛教(後篇)……本多日生
- 佛法の要行……本多日生
- 記事
 - 野口上人來信
 - 妙義法尼遷化
 - 各地教報
 - 誌料領收

昭和六年一月廿四日印刷

號月三年六十三第

